



スポーツ環境におけるセクシュアル・ハラスメント
認識と関連要因の検討：
指導者・競技者・愛好者への調査より

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-04-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 熊安, 貴美江, 高峰, 修 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00017329

研究ノート

スポーツ環境におけるセクシュアル・ハラスメント認識と関連要因の検討 ——指導者・競技者・愛好者への調査より——

熊安 貴美江
高峰 修

はじめに

近年、世界的な#Metoo運動の流れを受け、諸外国ではスポーツ環境におけるセクシュアル・ハラスメント（似下、セクハラ）の告発がみられるようになった。しかしながら昨今の日本のスポーツ環境において、パワハラや暴力は以前より可視化したものの、深刻なセクハラ告発の報道はあまりみられない。一般領域における性的虐待でさえ、加害者の責任が問われにくい社会的状況の中、個人の人権よりも組織の維持や競技成績が重視されがちなスポーツ環境においては、その告発は他領域よりも困難であり、発覚しにくいのではないかとと思われる。パワハラ事件が後を絶たない現状のスポーツ環境において、セクハラは依然として見えにくい問題であり、その発生を予防するスポーツ環境を整備することは重要な課題であり続けている。

本研究は、スポーツ環境で活動する人々のセクハラに関わる認識を、今日的なセクハラ概念に沿って明らかにするとともに、セクハラ認識に関連しうるいくつかの要因について、対象グループや性自認との関連を検討することを目的とする。

具体的には、日本のスポーツ指導者、競技者、愛好者を対象に調査を実施し、1. 今日国際的に共有されている概念を適用して、日本のスポーツ環境で活動する人々のセクハラに対する認識を明らかにすること、および、2. そのセクハラ認識（セクハラ行為の容認）に関連しうる要因として、スポーツ環境認識、ジェンダー平等観、同性愛親和度、自尊感情、権威主義的伝統主義などを想定し、これらの要因と対象グループや性自認との関連を明らかにする。

本稿では、調査結果の基本データ（単純集計とクロス集計）を簡略にまとめ

て報告するが、今後このデータを用いて、スポーツ指導者、競技者、愛好者のセクハラ認識に影響を与える要因について分析し、その因果モデルを検討するための前提資料としたい。

1. 先行研究

欧米では1980年代後半から研究成果が蓄積され、実態調査や意識調査 (Fasting, et al., 2003, Volkwein, et al., 1997等) が中心に行われ、スポーツ環境で起こるセクハラの特長性についての理論モデル (Brackenridge, 1997) も構築された。これらの多くの研究成果は、国家のスポーツ担当部局や主要なスポーツ組織におけるセクハラ防止対策の策定など、実践的課題の解決に積極的に活用されてきた。現在そうした対策の多くは、セクハラを含むより包括的なハラスメントの中に位置づけられ (Mountjoy, et al., 2016)、関係者の意識啓発や組織の防止対策としてスポーツ環境改善に生かされている。

筆者らが日本の大学生を対象に2003年に実施した調査¹では、高校時代にスポーツクラブ所属経験のない学生よりもある学生が、また一般学生より体育系学生の方が、さらにスポーツ組織に無所属の学生よりも体育会所属学生の方が、セクハラ認識が許容的であることがわかり (高峰ら, 2011)、セクハラになりうる行為が日常的に生じるスポーツ環境が、深刻なセクハラの発生につながるという可能性が示唆された (高峰ら, 2009)。続いてハイレベル (国体レベル) の指導者・競技者を対象に2007年に実施した調査²では、スポーツ環境においては、指導者よりも競技者が、また中・高年齢層よりも若年層が、そし

¹ 吉川康夫・飯田貴子・井谷恵子・熊安貴美江・太田あや子・高峰修 (2005) スポーツにおいて女子学生が経験するセクシュアル・ハラスメントの現状とその特殊性 (平成14~16年度日本学術振興会科学研究費補助金・基盤研究 (C) 14594013) : スポーツの場で男性から受けるセクハラの行為に対する経験と認識の特長性を、構造的に被害者となりやすい女子学生の立場から明らかにした。対象: 全国21の大学・短期大学の男女学生3,587人 / 調査時期: 2003年 / 回答数: 3,382部 (94.3%) / 内容: 「SHになりうる19言動」に対する認識

² 熊安貴美江・飯田貴子・太田あや子・高峰修・吉川康夫 (2009) スポーツ指導者と競技者のセクシュアル・ハラスメントに関する認識と経験の現状と特徴 (平成18~20年度日本学術振興会科学研究費補助金・基盤研究 (C) 18510233) : 指導者と競技者を対象としたセクハラ調査を実施し、当事者双方のセクハラ経験、および認識の差異に着目することにより、スポーツ環境におけるセクハラの現状と特徴を明らかにした。対象: 国体出場レベルの競技者1,162人 / 指導者3,734人 / 調査時期: 2007年 / 回答数: 競技者418部 (36.0%) / 指導者1,406部 (37.7%) / 内容: 「SHになりうる15言動」に対する認識

て男性よりも女性の方が、セクハラ認識が許容的である傾向がみられた（熊安ら，2011；高峰，2013）。総じて、スポーツへの関りが深い学生や、スポーツ組織における構造的弱者である女性や若年層の方が、自分たちの性的人権を脅かすセクハラに対して許容的であることがわかった。

これら一連の研究成果からは、所属するスポーツ組織に特有の権力構造や価値体系、慣習などがセクハラ認識に影響を及ぼす可能性が示唆されたが、より詳細に要因を検討するための十分なデータを従来調査では得ることができなかった。

このように筆者らは、スポーツ環境におけるセクハラの実態を解明するために複数回の調査を実施してきたが、その前提は基本的に、最も典型的な事例とされる「男性から女性へ」「指導者から競技者へ」の行為に限定されていた。しかしながら周知のように、セクハラは必ずしも男性から女性へ、また指導者から競技者へという方向性においてのみ生じるものではない。さらに、セクハラという概念自体が包括する内容も拡大しつつある今日、あらためてスポーツ環境におけるセクハラ認識について検討する必要がある。また、先行研究において分析したセクハラ認識に影響を与える要因については、検討課題として残されていた。

以上のような先行研究を踏まえ、本稿ではスポーツ環境において中核的な利害関係者である指導者と競技者、および日常的なスポーツ愛好者を対象に調査を実施し、セクハラに関する認識、およびそれに関連しうる要因について、基礎的なデータをまとめる。

2. 研究方法

18歳以上のスポーツの指導者、競技者、愛好者のそれぞれを対象に、Web形式による質問紙調査を実施した。調査の概要は以下のとおりである。

<指導者調査>

- ・調査方法：Web回答フォームをメールで配信
- ・調査委託業者名：株式会社マクロミル
- ・調査対象：公益財団法人日本スポーツ協会公認スポーツ指導者マイページ登録者のうち18歳以上の98,981人（2018年10月1日現在、資格保有者の重

複除く)

- 調査実施期間：2018年11月16日～12月7日
- 回収率：5.7% (5,621名)

<競技者調査>

2019年11月～12月にかけて中央競技団体（61団体）に対し調査協力依頼を行い、競技団体間で調査日程や調査項目を調整の上、以下のように調査実施した。

- 調査方法：Web回答フォームをメールで配信、または調査票のQRコードを記載した協力依頼用紙をチーム代表者から配布
- 調査委託業者名：マイボイスコム株式会社
- 調査対象：中央競技団体（61団体）のうち、協力を得られた一般財団法人日本ドッジボール協会、公益財団法人日本ハンドボール協会、および一般財団法人全日本大学サッカー連盟所属32大学、一般財団法人全日本大学女子サッカー連盟所属7大学³
- 調査実施期間：2020年4月1日～6月30日
- 回収率：一般財団法人日本ドッジボール協会：68人／659人（10.3%）、公益財団法人日本ハンドボール協会：416人／配信数不明、一般財団法人全日本大学サッカー連盟：1,614人／2,226人（72.5%）、一般財団法人全日本大学女子サッカー連盟：140人／159人（88.0%）。（公財）日本ハンドボール協会を除く回収率：59.9%

<愛好者調査>

- 調査方法：モニター調査
- 調査委託業者名：マイボイスコム株式会社
- 調査対象：当該調査会社への登録モニターに対するWeb調査（年齢層、性別コントロール⁴）。なお本調査では、「日常生活の中でなんらかの運動

³ 公益社団法人全日本アーチェリー連盟からも協力を得られたが、合宿期間中のナショナルチーム選手16名に対する質問紙調査として対応いただいたため、本稿の分析からは除外している。また、調査実施が新型コロナウイルス感染拡大時期と重なり、結果的に各競技団体から協力を得るのが困難であったことは追記しておきたい。

⁴ 前回科研調査（2007年9月～2008年8月実施、国民体育大会結団式参加選手団および国民体育大会強化選手団（いずれも18歳以上））における分析対象数（408名）と、2018年12月実施の上記スポーツ指導者調査の分析対象数（5,621名）を合計し、その年齢構成に対応させ、性別比は男性と女性を半々とした。

を実施している人」としてデータを回収し、「愛好者」とした。

- 調査実施期間：2019年3月14日～3月18日
- 回収率：5,354件に対して調査依頼がなされた。先行調査と同等の年齢構成、指定の性別比に至るまで回答を受け、最終的に1,080件の回答を得た。なお、統計分析にはSPSS statistics V.26を用いた。

3. 分析対象者の諸属性

回収した回答のうち、有効回答数8,878人（指導者5,621人、競技者2,177人、愛好者1,080人）（性自認：女性2,191人、男性6,650人、答えたくない他37人）を、本稿の分析対象とする。分析対象者の諸属性は表1のとおりである。性自認以下の項目については、各対象グループ別割合を%で示した。

表1 分析対象者の諸属性

対象グループ	指導者	競技者	愛好者	合計
性自認	n=5,621	n=2,177	n=1,080	n=8,878
女性	23.8%	14.3%	50.0%	24.7%
男性	75.6%	85.4%	50.0%	74.9%
答えたくない・わからない・その他	0.6%	0.3%	0.0%	0.4%
年齢層	n=5,620	n=2,177	n=1,080	n=8,877
10歳代	0.0%	40.2%	2.2%	10.1%
20歳代	6.3%	55.0%	9.1%	18.6%
30歳代	12.4%	3.8%	12.4%	10.3%
40歳代	25.5%	0.5%	23.5%	19.2%
50歳代	31.2%	0.5%	29.4%	23.4%
60歳代	19.4%	0.0%	18.3%	14.5%
70歳以上	5.2%	0.0%	5.0%	3.8%
活動レベル（指導・競技・実施）	n=5,621	n=2,177	n=1,080	n=8,878
国際レベル	7.5%	13.4%	1.3%	8.2%
全国レベル	34.8%	45.3%	3.1%	33.5%
地域レベル（“東北大会”など）	10.6%	21.5%	3.9%	12.4%
都道府県レベル	19.3%	17.1%	8.1%	17.4%
市区町村レベル	13.3%	2.1%	34.1%	13.1%
その他	14.5%	0.5%	49.5%	15.3%
活動頻度	n=4,700	n=2,177	n=1,080	n=7,957
高頻度（週に2～3回程度以上）	65.2%	92.4%	36.0%	68.7%
中頻度（月に2～3回から週1回程度）	23.8%	5.0%	28.1%	19.2%
低頻度（1年に1回～月に1回程度）	10.7%	1.7%	16.7%	9.1%
それ以下の頻度	0.3%	0.8%	19.3%	3.0%

年齢層は、50歳代：2,081人（23.4%）が最も多く、次に40歳代：1,700人（19.2%）、次いで20歳代：1,652人（18.6%）の順に多い。競技者はほかの2群と異なる分布を示し、10歳代と20歳代で全体の95%を占めている。活動レベル（これまでに指導、あるいは出場した最高レベルの大会）については、全国レベルが最も多く（2,977人、33.5%）、次いで都道府県レベル（1,546人、17.4%）、その他（あまり競争的ではない競技で判断に迷う）（1,361人、15.3%）の順に多い。愛好者の約半数は、その他と回答している。活動頻度は、どの対象グループも高頻度（週に2～3回程度以上）が最も多く（5,467人、68.7%）、次に中頻度（月に2～3回から週1回程度）（1,529人、19.2%）と回答した人が多い。1年に1回～月に1回程度は722人（9.1%）、それ以下の頻度は239人（3.0%）であった。

4. 調査内容とプレテスト、および倫理的配慮

セクハラに対する認識とセクハラ遭遇時の対応、および、スポーツ環境内のセクハラ認識に影響を与えうる要因として、以下の調査項目を設定した。

1. セクハラ認識（セクハラ行為の容認）

筆者らがこれまで行ってきた調査研究の成果（熊安ら、2011；高峰ら、2009；2011）、ならびに国際オリンピック委員会（IOC）のウェブサイトに掲載されている“Harassment and Abuse in Sport”（IOC online）を参考にして、Homophobia（同性愛嫌悪）、Sexual Abuse（性的虐待）、Hazing（新入りいじめの儀式）、Bystanding（傍観）、Gender Harassment（ジェンダー・ハラスメント）などにかかわる具体的質問項目を検討した。スポーツ環境における人間関係（力関係があり、いやとは言えない関係）において、受け手が望まない17項目の言動を、大目に見て許せる（容認できる）か否かを、2件法でたずねた（「容認できない」、「容認できる」）。

2. セクハラ対応と傍観

前述のIOCの情報によれば、周囲の人間による「傍観」こそがスポーツ環境でセクハラ被害者に沈黙を強い、セクハラが許容される土壌を醸成するとされる。そこで、容認できないセクハラ状況に遭遇した場合、自身が何らかの対応をするか否かを問い、さらに対応できない場合の理由について、複数選択でた

ずねた。

3. スポーツ環境認識

スポーツ環境におけるセクハラ認識は、その人物が育ってきたスポーツ環境や、指導者の価値観や方針によって形成されたスポーツ観によって影響を受けていると考えられる。そこで、自身のスポーツ観にいちばん影響を与えたと思われる時期のスポーツ環境についてたずねた（勝利至上主義、指導者との相互理解、集団主義、権威・伝統主義などに関連する12項目。「まったくあてはまらない」～「とてもあてはまる」の4件法）。

4. ジェンダー平等観

スポーツ環境におけるセクハラ認識は、社会生活上の性別役割分業観によっても影響を受けると推測される。そこで、鈴木の平等主義的性役割態度スケールの短縮版（鈴木, 1994）による15項目5件法を参照し、男性にとっても適用可能なジェンダー平等項目を作成した。プレテストによる因子分析の結果、4項目を削除し、本調査のジェンダー平等観として設定した（11項目。「とてもそう思う」～「どちらともいえない」～「まったくそう思わない」の5件法）。

5. 同性愛親和度

藤山らがHudson and Ricketts（1980）のIndex of homophobiaによる25項目を元に日本の慣習に合わせて選択した23項目（藤山ら, 2014）を参照した。その際、同性愛嫌悪を助長しないよう、肯定的な文章に書き換えたため、「同性愛親和度」と表現した（7項目。「とてもそう思う」～「どちらともいえない」～「まったくそう思わない」の5件法）。

6. 自尊感情

スポーツ環境のセクハラ認識に影響を及ぼす要因として、自尊感情を設定した。内田と上埜（2010）を参照して、Rosenberg自尊感情尺度（RSES）の日本語版RSES-J（Mimura & Griffiths, 2007）10項目をそのまま用い、自尊感情についてたずねた（10項目。「とてもそう思う」～「まったくそう思わない」の4件法）。

7. 権威主義的伝統主義

スポーツ環境のセクハラ認識に影響を及ぼすもう一つの要因として、権威主義的伝統主義を採用した。藤原ら（2012）を参照し、これまで多くの調査研究において用いられてきた権威主義的伝統主義5項目についてたずねた（5項

目。「反対」「賛成でも反対でもない」「賛成」の3件法)。

以上の設問についてプレテストを実施して信頼性と妥当性を検討し、各要因の項目を整理した。プレテストは、A大学学生100名と、B大学学生120名に対して、2018年6月に実施した。

プレテストを実施するにあたり、大阪府立大学高等教育推進機構研究倫理委員会において倫理審査を受け、平成30年6月28日付で承認された。

本研究の分析対象についても再度、各要因の信頼性と妥当性を検討したところ、その結果はいずれも良好であった⁵

5. 結果

本稿では、設問ごとに得られたデータを、対象グループ（指導者・競技者・愛好者）／性自認との関連性において検討する。

1. スポーツ環境における人々のセクハラ認識（セクハラ行為の容認）

スポーツ環境内の人間関係において、力関係があり、いやとは言えない関係性がある場合、受け手が望まない以下のような17のセクハラ言動について、大目にみて許せる（容認できる）かどうかをたずねた（表2）。

⁵ 検討結果は、高峰修（2021）スポーツ環境におけるセクシュアル・ハラスメント認識にかかわる要因の検討、明治大学教養論集 通巻552号に掲載予定

表2 セクハラに関する言動

容姿に関する発言をたびたび言う／言われる
ひわいな言葉や性的内容の冗談を言ったり、メール等を送る／送られる
恋愛・妊娠・結婚などのプライベートで性的な私生活についてたずねる／たずねられる
相手のからだの性的な部分をじろじろ見る／見られる
挨拶や励ましのためにからだにさわる／さわられる
性的な部分のマッサージやテーピングをする／される
断りなく異性の更衣室に入る／入られる
遠征や合宿先で、異性の人同士が同じ部屋に泊まる／泊まられる
飲み会で異性にデュエットやお酌を強いる／強いられる
男だからといって痛みや屈辱に耐えることを強いる／強いられる
男らしさ、女らしさ（の通念）に基づいた言動を求める／求められる
同性愛であることを否定するような発言をする／される
同性愛を理由にいやがらせをする／される
新入会員歓迎会の飲み会などで、裸にさせる／させられる
裸あるいは裸に近い恰好で練習させる／させられる
親密な関係をせまる／せまられる
性的関係をせまる／せまられる

図1に、「容認できる」と回答した人の対象グループ別割合を示した。

セクハラ容認と対象グループとの関連についてカイ2乗検定を行ったところ、「男性に痛みや屈辱に耐えることを強いる」以外の16項目において有意差が認められた。

残差分析の結果、指導者は、「からだにさわる（挨拶や励まし）」(38.7%)、「異性にデュエットやお酌を強いる」(16.2%)、「男らしさ、女らしさを求める」(34.4%)の3項目を「容認できる」と回答した割合が有意に高かった。競技者は、有意差のみられた16項目の内、「からだにさわる」、「デュエットやお酌」、「男らしさ、女らしさを求める」、「同性愛に対する否定的発言」、「裸あるいは裸に近い恰好で練習させる」以外の11項目について容認できる人の割合が有意に高い。また愛好者は、「性的な部分をじろじろ見る」(7.1%)、「断りなく異性の更衣室に入る」(5.4%)、「同性愛に対する否定的発言」(10.6%)、「同性愛を理由にしたいやがらせをする」(5.8%)、「新入会員歓迎会などで、裸にさせる」(5.5%)、「裸あるいは裸に近い恰好で練習させる」(4.8%)、「性的関係をせまる」(4.4%)の7項目において、「容認できる」と回答した割合が有意に高かった

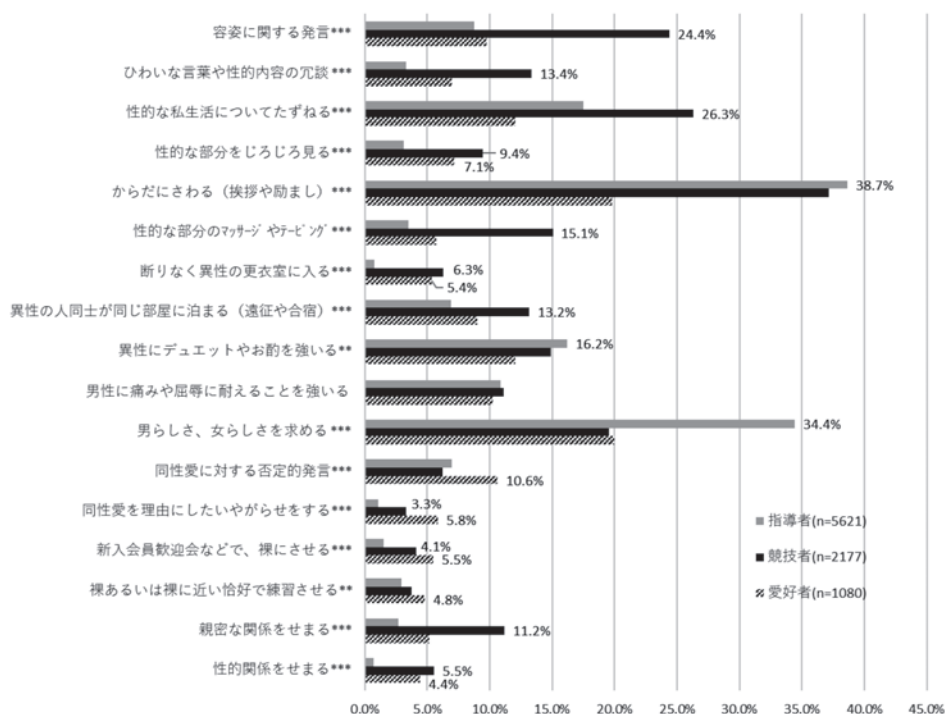


図1 セクハラ言動「容認できる」と回答した人の対象グループ別割合(%)

(**: $p<0.01$, ***: $p<0.001$) (各項目で有意に割合の高いグループに、その%を記した)

(有意に高い割合を示した値(%)をグラフに付記している)。

17項目のセクハラ認識に関する回答値(1~2)を個人ごとに合計し、それをセクハラ容認得点とした(得点が高いほど、「容認できる」=セクハラに許容的)。対象グループ間でセクハラ容認得点の中央値を比較するためにKruskal-Wallis(クラスカル・ウォリス)検定を行った結果、有意差がみられた(検定統計量=128.206、d.f.=2、有意確率 $p<0.001$)。Dunn-Bonferroni(ダン-ボンフェローニ)による多重比較の結果、愛好者と他の2群との間に有意差が認められた(ともに $p<0.001$) (表3・表4)。

指導者や競技者は、愛好者よりもセクハラ容認得点が有意に高く、より許容的なセクハラ認識をもつ傾向があるといえる。前二者は、一般スポーツ実施者よりも深くスポーツに関わっていると前提されるため、スポーツへの関りが深い方がセクハラに対して許容的という大学生調査(高峰ら, 2011)と同様の知見が、本調査対象者においても確認されたといえよう。

表3 セクハラ容認得点と対象グループのKruskal-Wallis検定結果

	度数	平均ランク	平均値
指導者	5621	4546.93	18.60
競技者	2177	4554.39	19.25
愛好者	1080	3648.75	18.54

表4 セクハラ容認得点と対象グループの多重比較結果

	指導者	競技者	愛好者
指導者		n.s.	***
競技者			***
愛好者			

*:p<.05, **:p<.01, ***:p<.001

次に、セクハラ容認得点と性自認との関連について同様にKruskal-Wallis検定を行った結果、有意差がみられ（検定統計量 = 69.795、d.f. = 2、有意確率 $p < .001$ ）、Dunn-Bonferroniによる多重比較の結果、男性と女性間に有意差が認められた（ $p < .001$ ）（表5・表6）。

男性は女性よりも有意にセクハラ容認得点が高く、セクハラに対してより許容的である傾向がみられたが、これは筆者らの先行研究（熊安ら，2011；高峰，2013）とは逆の傾向を示すものである。

表5 セクハラ容認得点と性自認のKruskal-Wallis検定結果

	度数	平均ランク	平均値
女性	2191	4060.23	18.34
男性	6650	4563.40	18.89
答えたくない他	37	4630.16	18.97

表6 セクハラ容認得点と性自認の多重比較結果

	女性	男性	答えたくない他
女性		***	n.s.
男性			n.s.
答えたくない他			

*:p<.05, **:p<.01, ***:p<.001

2. セクハラ対応と傍観

設問1で、回答者が「容認できない」と思う状況に遭遇した場合、何らかの対応をとるかどうかをたずねた結果、総和では、全回答者8,838人の内6,989人(79.1%)が「何らかの行動をとる」と回答した。結果の内訳を対象グループ別、性自認別に、表7と表8に示した。%は各群内でその項目を選択した人の割合を示す。

対応の有無(何らかの行動をとる／とらない)と対象グループの関連についてカイ2乗検定を行ったところ、有意差がみられた。残差分析の結果、「競技者」で何らかの「行動をとる」人の割合が有意に高く(82.4%)、「愛好者」で「行動をとらない」人の割合が有意に高い(25.2%)($\chi^2(2) = 27.013, p < .001$)。

対応の有無と性自認との関連は認められず($\chi^2(2) = 4.538, p = .103$)、性自認にかかわらず6割強～8割近くの人は何らかの行動をとると回答した。

表7 セクハラ行為に遭遇したときの対応(対象グループ別割合：%)

	指導者(n=5619)	競技者(n=2139)	愛好者(n=1080)
何らかの行動をとる	78.6%	82.4%***	74.8%
行動をとらない	21.4%	17.6%	25.2%***

*:p<.05, **:p<.01, ***:p<.001

表8 セクハラ行為に遭遇したときの対応(性自認別割合：%)

	女性(n=2188)	男性(n=6613)	答えたくないほか(n=37)
何らかの行動をとる	79.2%	79.1%	64.9%
行動をとらない	20.8%	20.9%	35.1%

n.s.

次に、「行動をとらない」と回答した約2割の人にその理由をたずねた(その他を含む9項目の複数選択)。これらは、スポーツ環境においてセクハラが「傍観」される理由を構成するものとみなされる。

表9に、その項目を選択した人の対象グループ別割合を示した。セクハラ行為遭遇時に対応をとらない理由と対象グループの関連についてカイ2乗検定と残差分析を行ったところ、8項目中7項目で有意差が認められた(有意に高い割合を示した値にアスタリスク(*)を付記した)。

表9 対応する行動をとらない理由（対象グループ別割合：％）

	指導者(n=1201)	競技者(n=376)	愛好者(n=272)
行動を起こしても状況が変わりそうにないから	33.8%**	30.9%	22.8%
自分の立場が危うくなるから	18.7%	22.3%	26.1%*
めんどろなことに関わりたくないから	33.5%	50.0%***	31.3%
自分がスポーツを行う環境が混乱するから	21.1%***	21.5%	8.1%
スポーツ環境ではこうした言動をがまんするのが当たり前だと思うから	8.9%	9.0%	5.1%
被害者側にも非があると思うから	12.8%***	5.6%	2.6%
どう対応したらよいかわからないから	37.3%	41.2%	52.9%***
その他	8.0%***	1.3%	0.0%

*:p<.05, **:p<.01, ***:p<.001

まず、各群内で回答率の高い項目に注目すると、指導者と競技者の上位3項目はともに、「行動を起こしても状況が変わりそうにないから」、「めんどろなことに関わりたくないから」、「どう対応したらよいかわからないから」であり、愛好者では、「状況が変わりそうにない」に代わって「自分の立場が危うくなるから」の回答率が3番目に高かった。

次に各群間で比較すると、指導者で有意に回答率が高い項目は、「行動を起こしても状況が変わりそうにないから」(33.8%)、「自分がスポーツを行う環境が混乱するから」(21.1%)、「被害者側にも非があると思うから」(12.8%)、「その他」(8.0%)であった。競技者で有意に回答率が高い項目は、「めんどろなことに関わりたくないから」(50.0%)、そして愛好者は、「自分の立場が危うくなるから」(26.1%)、「どう対応したらよいかわからないから」(52.9%)であった。「どう対応してよいかわからない」の回答率は、対象グループ種別にかかわらず総じて高い。

同様に、性自認別割合を表10に示した。セクハラ行為遭遇時に対応をとらない理由と性自認の関連についてカイ2乗検定を行ったところ、8項目中3項目で有意差が認められた。残差分析の結果、「自分の立場が危うくなるから」(24.3%)、「どう対応したらよいかわからないから」(51.1%)は女性において、「めんどろなことに関わりたくないから」(38.9%)は男性において、回答率が有意に高かった。

表10 対応する行動をとらない理由（性自認別割合：％）

	女性(n=456)	男性(n=1380)	答えたくない他 (n=13)
行動を起こしても状況が変わりそうにないから	32.2%	31.2%	46.2%
自分の立場が危うくなるから	24.3%*	19.2%	30.8%
めんどろなことに関わりたくないから	29.2%	38.9%**	38.5%
自分がスポーツを行う環境が混乱するから	18.9%	19.4%	15.4%
スポーツ環境ではこうした言動をがまんするの が当たり前だと思うから	6.6%	8.9%	15.4%
被害者側にも非があると思うから	8.6%	10.2%	15.4%
どう対応したらよいかわからないから	51.1%***	37.1%	15.4%
その他	5.3%	5.5%	7.7%

*:p<.05, **:p<.01, ***:p<.001

3. スポーツ環境認識

自身のスポーツ観にいちばん影響を与えたと思われる時期のスポーツ環境12項目についてたずねた（4件法）。「まったく／あまりあてはまらない」を「あてはまらない」に、「とても／ややあてはまる」を「あてはまる」の2値に変換し、図2に、「あてはまる」と回答した人の対象グループ別割合を示した。

「あてはまる」と回答した人と対象グループとの関連についてカイ2乗検定を行ったところ、すべての項目において有意差がみられた（すべてp<.001）。残差分析の結果、指導者は「個人の成長よりもチームやクラブの目標達成が優先された」以外の11項目において、「あてはまる」と回答した割合が有意に高かった。また、競技者は「個人の成長よりもチームやクラブの目標達成が優先された」（42.7%）、「勝つことが最優先される雰囲気だった」（56.5%）、「指導者は勝つことが一番大事だと話していた」（37.7%）の3項目において、「あてはまる」との回答率が有意に高かった（有意に高い割合を示した値（％）をグラフに付記している）。

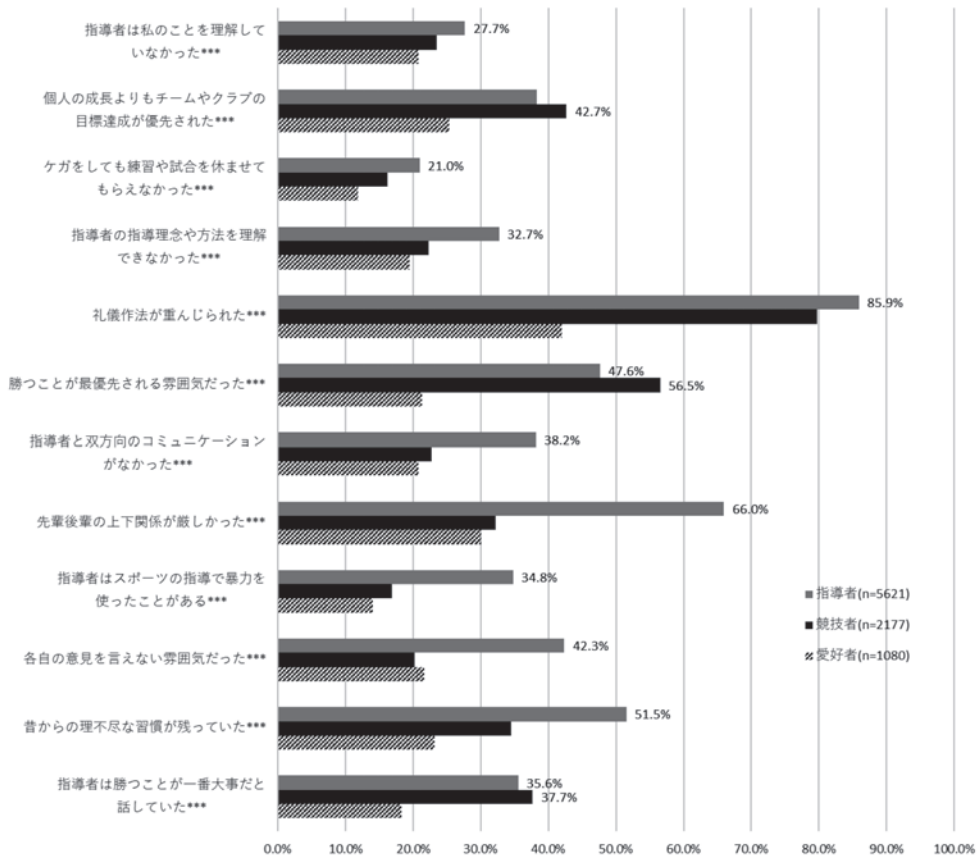


図2 スポーツ環境認識「あてはまる」と回答した人の対象グループ別割合(%)

(***: $p < .001$) (各項目で有意に割合の高いグループに、その%を記した)

12項目のスポーツ環境認識の回答値(1~4)を個人ごとに合計して、それをスポーツ環境認識得点とした(得点が高いほど、「あてはまる」=非民主的な環境)。対象グループ間でスポーツ環境認識得点の中央値を比較するためにKruskal-Wallis検定を行った結果、有意差がみられた(検定統計量=667.159、 $d.f. = 2$ 、有意確率 $p < .001$)。Dunn-Bonferroniによる多重比較の結果、すべての対象グループ間に有意差が認められた(すべて $p < .001$) (表11・表12)。自身のスポーツ観に最も影響を与えたスポーツ環境については、指導者の得点が最も高く非民主的であった傾向があり、次に競技者が高い。愛好者の得点が最も低く、最も民主的な環境であった。

表11 スポーツ環境認識得点と対象グループのKruskal-Wallis検定結果

	度数	平均ランク	平均値
指導者	5621	4918.73	28.17
競技者	2177	3973.45	25.60
愛好者	1080	2884.71	21.76

表12 スポーツ環境認識得点と対象グループの多重比較結果

	指導者	競技者	愛好者
指導者		***	***
競技者			***
愛好者			

*:p<.05, **:p<.01, ***:p<.001

性自認間で同様に、スポーツ環境認識得点の中央値を比較するためにKruskal-Wallis検定を行った結果、有意差がみられ（検定統計量=75.870、d.f.=2、有意確率p<.001）、Dunn-Bonferroniによる多重比較の結果、女性と男性（p<.001）、および女性と「答えたくない他」との間に有意差が認められた（p<.01）（表13・表14）。現在の自身のスポーツ観に最も影響を与えたスポーツ環境認識については、男性と「答えたくない他」の得点が女性よりも高く、より非民主的な環境であったことがわかる。

表13 スポーツ環境認識得点と性自認のKruskal-Wallis検定結果

	度数	平均ランク	平均値
女性	2191	4035.43	25.47
男性	6650	4567.56	27.17
答えたくない他	37	5350.18	30.16

表14 スポーツ環境認識得点と性自認の多重比較結果

	女性	男性	答えたくない他
女性		***	**
男性			n.s.
答えたくない他			

*:p<.05, **:p<.01, ***:p<.001

4. ジェンダー平等観

11項目のジェンダー平等に関する考えをたずねた（5件法）。反転項目（図中の項目に※を付した）については集計時に数値を逆転させ、3値（「ジェンダー平等志向」と「どちらともいえない」「非ジェンダー平等志向」）に変換した。図3に「ジェンダー平等志向」（反転項目については、内容を否定した人（「そう思わない」「まったくそう思わない」と回答した人）の対象グループ別割合を示した。

ジェンダー平等観と対象グループとの関連についてカイ2乗検定を行ったところ、すべての項目において有意差がみられた（すべて $p<.001$ ）。残差分析の結果、競技者は、「※男の子は男らしく、女の子は女らしく育てることが非常に大切（否定）」（34.4%）、「男性も、働く女性同様、仕事と家事を両立すべき」（71.5%）、「男性の家事参加により平等な関係を持ちやすくなる」（77.9%）の

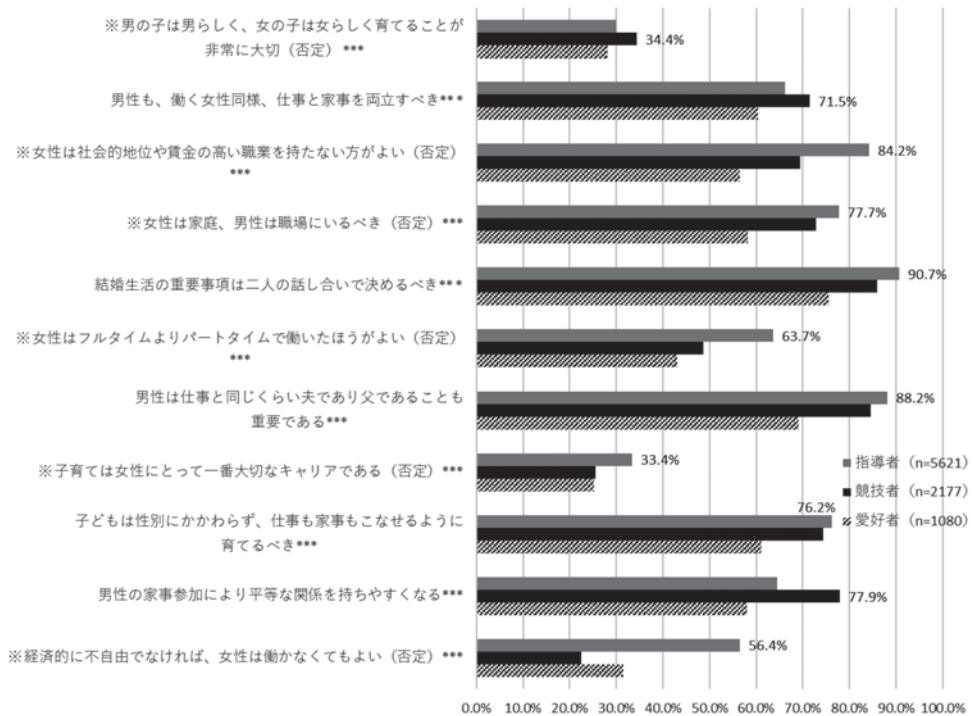


図3 ジェンダー平等を志向する人の対象グループ別割合（%）（***: $p<.001$ ）

※は反転項目であり、「そう思わない」・「まったくそう思わない」と回答した人の割合を示す。

（各項目で有意に割合の高いグループに、その%を記した）

3項目において、また指導者はそれら以外の8項目において、ジェンダー平等を志向する人の割合が有意に高かった（有意に高い割合を示した値（%）をグラフに付記している）。

11項目のジェンダー平等観の回答値（1～5：反転項目逆転後）を個人ごとに合計し、それをジェンダー平等観得点とした（得点が高いほどジェンダー平等志向が低く、伝統的なジェンダー観）。対象グループ間でジェンダー平等観得点の中央値を比較するためにKruskal-Wallis検定を行った結果、有意差がみられた（検定統計量 = 232.702、d.f. = 2、有意確率 $p < .001$ ）。Dunn-Bonferroniによる多重比較の結果、すべての対象グループ間で有意差が認められた（愛好者と他の2群間はともに $p < .001$ 、指導者と競技者間は $p < .01$ ）（表15・表16）。指導者のジェンダー平等観得点が最も低く、ジェンダー平等志向が最も高いことがわかる。次いで競技者、愛好者の順に得点が高くなり、愛好者のジェンダー平等志向が最も低い、つまりより伝統的なジェンダー観を持つ傾向があるといえる。

表15 ジェンダー平等観得点と対象グループのKruskal-Wallis検定結果

	度数	平均ランク	平均値
指導者	5621	4234.41	24.09
競技者	2177	4427.50	24.59
愛好者	1080	5531.10	26.84

表16 ジェンダー平等観得点と対象グループの多重比較結果

	指導者	競技者	愛好者
指導者		**	***
競技者			***
愛好者			

*: $p < .05$, **: $p < .01$, ***: $p < .001$

性自認間で同様に、ジェンダー平等観得点の中央値を比較するためにKruskal-Wallis検定を行った結果、有意差がみられ（検定統計量 = 172.084、d.f. = 2、有意確率 $p < .001$ ）、Dunn-Bonferroniによる多重比較の結果、男性と他の2群との間に有意差が認められた（ともに $p < .001$ ）（表17・表18）。男性は他の2

群よりも、ジェンダー平等観得点が有意に高く、伝統的なジェンダー観をもつといえる。

表17 ジェンダー平等観得点と性自認のKruskal-Wallis検定結果

	度数	平均ランク	平均値
女性	2191	3851.21	23.31
男性	6650	4642.25	24.97
答えたくない他	37	2836.07	21.22

表18 ジェンダー平等観得点と性自認の多重比較結果

	女性	男性	答えたくない他
女性		***	n.s.
男性			***
答えたくない他			

*: $p<.05$, **: $p<.01$, ***: $p<.001$

5. 同性愛親和度

同性愛に対する親和的態度7項目（5件法）についてたずねた。「とても／そう思う」を「同性愛親和的」、「まったく／そう思わない」を「同性愛嫌悪的」とし、「どちらともいえない」を加えた3値に変換した。図4に「同性愛親和的」な回答をした人の対象グループ別割合を示した。

同性愛親和度と対象グループとの関連についてカイ2乗検定を行ったところ、全項目において有意差が認められた（すべて $p<.001$ ）。

残差分析の結果、「社交の場に同性愛者がいても、楽しむことができる」、「親友が同性愛者とわかっていても、いやではない」では、指導者（各72.8%、60.9%）と競技者（各74.9%、62.1%）の回答率がともに有意に高かった。また指導者は、「同性愛者と仕事や勉強をするのは、いやではない」（69.4%）、「自分が同性の人を魅力的だと感じていても、違和感はない」（42.2%）が、競技者は「自分の家族が同性愛者だとわかっていても、受け入れられる」（51.1%）、「自分やきょうだいの先生が同性愛者であるとわかっていても、いやではない」（55.4%）の回答率が有意に高かった（有意に高い割合を示した値（%）をグラフに付記している）。

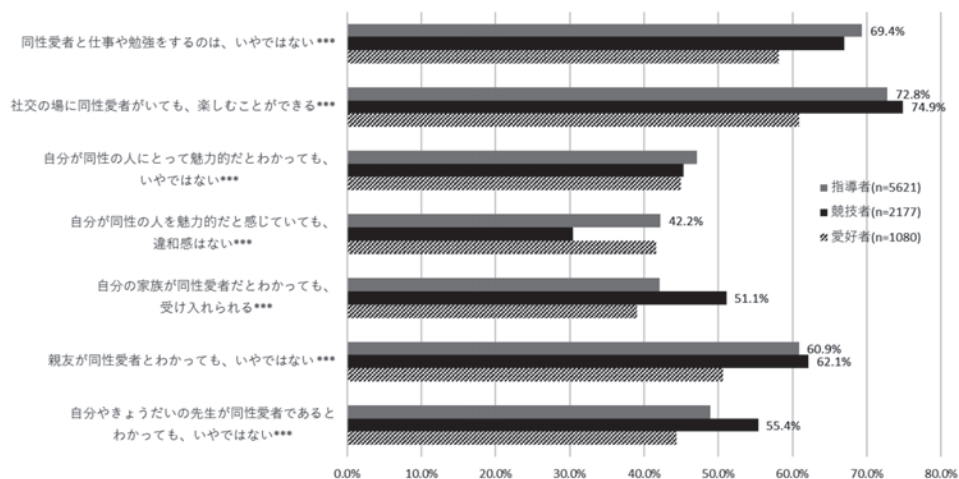


図4 同性愛親和的な回答をした人の対象グループ別割合(%) (***: $p < .001$)
(各項目で有意に割合の高いグループに、その%を記した)

7項目の同性愛親和度に対する回答値(1~5)を個人ごとに合計して、それを同性愛親和度得点とした(得点が高いほど、「そう思わない」=同性愛嫌悪的)。対象グループ間で同性愛親和度得点の中央値を比較するためにKruskal-Wallis検定を行った結果、有意差がみられた(検定統計量=41.046, d.f. = 2、有意確率 $p < .001$)。Dunn-Bonferroniによる多重比較の結果、競技者と他の2群との間に有意差が認められた(ともに $p < .001$) (表19・表20)。競技者は他の2群よりも同性愛親和度得点が有意に低く、同性愛親和度が高いことがわかった。

表19 同性愛親和度得点と対象グループのKruskal-Wallis検定結果

	度数	平均ランク	平均値
指導者	5621	4500.75	17.38
競技者	2177	4154.66	16.52
愛好者	1080	4694.90	17.73

表20 同性愛親和度得点と対象グループの多重比較結果

	指導者	競技者	愛好者
指導者		***	n.s.
競技者			***
愛好者			

*: $p < .05$, **: $p < .01$, ***: $p < .001$

性自認別で同様に、同性愛親和度得点の中央値を比較するためにKruskal-Wallis検定を行った結果、有意差がみられ（検定統計量=621.817、d.f.=2、有意確率 $p<.001$ ）、Dunn-Bonferroniによる多重比較の結果、すべての性自認間に有意差が認められた（女性と「答えたくない他」間は $p<.01$ 、その他は $p<.001$ ）（表21・表22）。男性は、他の2群よりも有意に得点が高く、同性愛嫌悪的な傾向が強いといえる。

表21 同性愛親和度得点と性自認のKruskal-Wallis検定結果

	度数	平均ランク	平均値
女性	2191	3301.86	15.02
男性	6650	4827.99	17.96
答えたくない他	37	1983.68	11.65

表22 同性愛親和度得点と性自認の多重比較結果

	女性	男性	答えたくない他
女性		***	**
男性			***
答えたくない他			

*: $p<.05$, **: $p<.01$, ***: $p<.001$

6. 自尊感情

10項目の自尊感情についてたずねた（4件法）。反転項目（図中の項目に※を付した）については集計時に数値を逆転させ、2値（「肯定的自尊感情」と「否定的自尊感情」）に変換した。図5に「肯定的自尊感情」（反転項目については、内容を否定した人（「そう思わない」「まったくそう思わない」と回答した人）の対象グループ別割合を示した。

自尊感情と対象グループとの関連についてカイ2乗検定を行ったところ、全項目において有意差が認められた。残差分析の結果、指導者は全項目において肯定的回答者の割合が有意に高く、愛好者は「私は、自分自身にだいたい満足している」（59.5%）においてのみ、肯定的回答者の割合が有意に高かった（有意に高い割合を示した値（%）をグラフに付記している）。

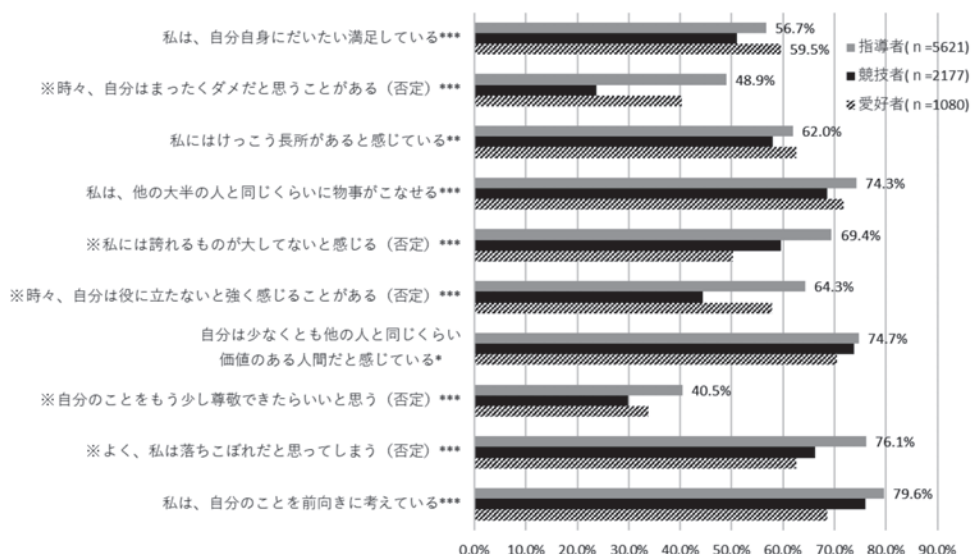


図5 肯定的自尊感情を示した人の対象グループ別割合 (%) (*: $p < .05$, **: $p < .01$, ***: $p < .001$)

※は反転項目であり、「そう思わない」・「まったくそう思わない」と回答した人の割合を示す。

(各項目で有意に割合の高いグループに、その%を記した)

10項目の自尊感情に対する回答値（1～4：反転項目逆転後）を個人ごとに合計して、それを自尊感情得点とした（得点が高いほど、自尊感情が低く自己否定的）。対象グループ間で自尊感情得点の中央値を比較するためにKruskal-Wallis検定を行った結果、有意差がみられた（検定統計量 = 192.050、d.f. = 2、有意確率 $p < .001$ ）。Dunn-Bonferroniによる多重比較の結果、指導者と他の2群との間に有意差が認められた（ともに $p < .001$ ）（表23・表24）。指導者は他の2群よりも有意に自尊感情得点が低く、より肯定的な自尊感情をもつ傾向が示された。

表23 自尊感情得点と対象グループのKruskal-Wallis検定結果

	度数	平均ランク	平均値
指導者	5621	4156.14	22.84
競技者	2177	4989.68	24.15
愛好者	1080	4805.24	24.03

表24 自尊感情得点と対象グループの多重比較結果

	指導者	競技者	愛好者
指導者		***	***
競技者			n.s.
愛好者			

*:p<.05, **:p<.01, ***:p<.001

性自認間で同様に、自尊感情得点の中央値を比較するためにKruskal-Wallis検定を行った結果、有意差がみられ（検定統計量 = 29.495、d.f. = 2、有意確率 $p < .001$ ）、Dunn-Bonferroniによる多重比較の結果、男性と女性間に有意差が認められた（ $p < .001$ ）（表25・表26）。女性は男性よりも有意に得点が高く、より否定的な自尊感情をもつ傾向が示された。

表25 自尊感情得点と性自認のKruskal-Wallis検定結果

	度数	平均ランク	平均値
女性	2191	4690.08	23.82
男性	6650	4354.51	23.13
答えたくない他	37	4877.30	23.73

表26 自尊感情得点と性自認の多重比較結果

	女性	男性	答えたくない他
女性		***	n.s.
男性			n.s.
答えたくない他			

*:p<.05, **:p<.01, ***:p<.001

7. 権威主義的伝統主義

5項目の権威主義的伝統主義に関する考えについてたずねた（3件法）。図6に「賛成」と回答した人のグループ別割合を示した。

権威主義的伝統主義と対象グループとの関連についてカイ2乗検定を行ったところ、全項目において有意差が認められた（すべて $p < .001$ ）。残差分析の結果、競技者は「よい指導者は尊敬を受けるためには下の者に対して厳格でなけ

ればならない」以外の全項目において「賛成」とした人の回答率が有意に高く、特に「以前からなされたやり方を守ることが最上の結果を生む」(14.6%)、「権威のある人々には、つねに敬意を払わなければならない」(28.0%)の割合が高い。愛好者は「以前からなされたやり方を守ることが最上の結果を生む」(9.4%)、「先祖代々と違ったやり方をとることは間違いだ」(6.6%)、「子どもに教えるべき最も大切なことは両親に対する絶対服従である」(3.7%)の3項目において、肯定的回答者率が有意に高かった。指導者の肯定的回答が有意に高い項目はなく、指導者は全般にこうした考え方には否定的であることがわかる(有意に高い割合を示した値(%))をグラフに付記している)。

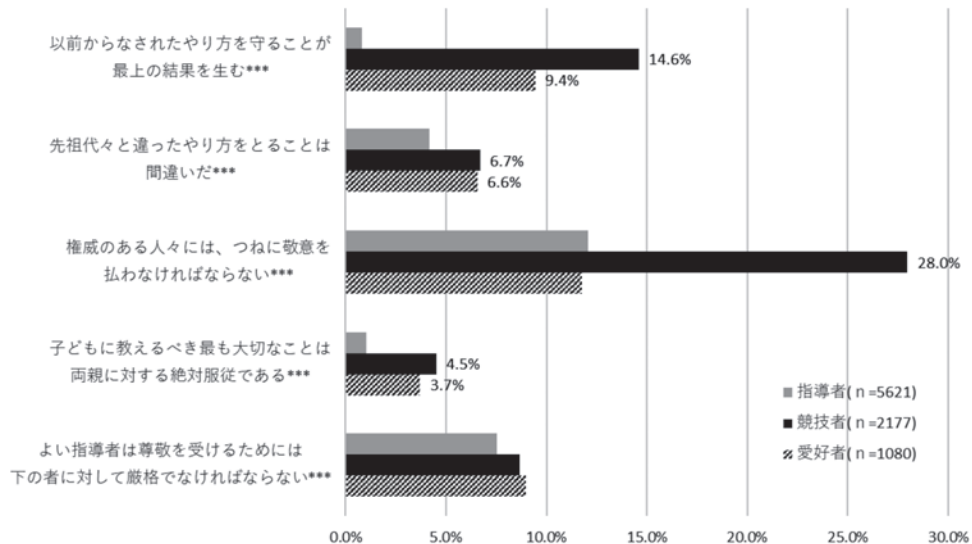


図6 権威主義的伝統主義に「賛成」と回答した人の対象グループ別割合 (%)

(***: $p < .001$) (各項目で有意に割合の高いグループに、その%を記した)

5項目の権威主義的伝統主義の回答値(1~3)を個人ごとに合計して、それを権威主義的伝統主義得点とした(得点が高いほど、権威主義的伝統主義傾向が強い)。対象グループ間で権威主義的伝統主義得点の中央値を比較するためにKruskal-Wallis検定を行った結果、有意差がみられた(検定統計量=140.563、d.f.=2、有意確率 $p < .001$)。Dunn-Bonferroniによる多重比較の結果、指導者と他の2群との間に有意差が認められた(ともに $p < .001$) (表27・表28)。

競技者と愛好者は指導者よりも有意に権威主義的伝統主義得点が高く、権威主義的伝統主義傾向が強いことがわかった。

表27 権威主義的伝統主義得点と対象グループのKruskal-Wallis検定結果

	度数	平均ランク	平均値
指導者	5621	4197.84	8.25
競技者	2177	4872.64	8.82
愛好者	1080	4824.13	8.74

表28 権威主義的伝統主義得点と対象グループの多重比較結果

	指導者	競技者	愛好者
指導者		***	***
競技者			n.s.
愛好者			

*:p<.05, **:p<.01, ***:p<.001

性自認間で同様に、権威主義的伝統主義得点の中央値を比較するためにKruskal-Wallis検定を行った結果、有意差がみられ（検定統計量=19.068、d.f.=2、有意確率p<.001）、Dunn-Bonferroniによる多重比較の結果、男性と女性の間には有意差が認められた（p<.001）（表29・表30）。男性は女性よりも有意に得点が高く、権威主義的伝統主義傾向が強いことがわかった。

表29 権威主義的伝統主義得点と性自認のKruskal-Wallis検定結果

	度数	平均ランク	平均値
女性	2191	4235.24	8.30
男性	6650	4506.88	8.50
答えたくない他	37	4425.18	8.41

表30 権威主義的伝統主義得点と性自認の多重比較結果

	女性	男性	答えたくない他
女性		***	n.s.
男性			n.s.
答えたくない他			

*:p<.05, **:p<.01, ***:p<.001

6. 考察

今日的な概念に基づいてスポーツ環境における人々のセクハラ認識を再検討し、それに関連する諸要因について個別に、対象グループ、性自認との関連から調査結果を分析した。

セクハラ認識については、スポーツへの関わりが深い人の方がセクハラに対して許容的であるという先行研究の知見が、本調査対象者においても追認された。他方、男性が女性よりもセクハラ認識が許容的という、先行研究とは逆の結果が示されたが、ここ数年の社会全体のセクハラ認識の高まりを受け、構造的に被害を受けやすい女性たちが、以前よりもセクハラを「被害」として認識できる土壌が醸成されてきたことの表れかもしれない。容認できないセクハラ状況に遭遇した際には、約8割の人が「何らかの行動をとる」と回答した点は、上記のような社会的状況と考え合わせると、望ましい傾向であるといえる。

一方で、セクハラ行為遭遇時に何らかの対応をしない人の約4～5割が、その理由を「対応の仕方がわからない」とするなど、スポーツ環境における「傍観」の背景にある種々の理由も明らかになった。特に指導者に、何らかの行動を起こしても状況を変えられそうにないという諦念や、自身の置かれたスポーツ環境を混乱させたくないという事なかれ主義、さらに被害者側にも非があると考える人の割合が有意に高いという事実には、注意を喚起しておきたい。諦念や事なかれ主義は、自身の属するスポーツ環境で人権に関わる問題が生じたとしても、自浄作用が働かない組織であるということと、それに対する諦めを示しているとも理解できる。また、本調査のセクハラ認識項目において、「いやと言えない関係性の中で、受け手が望まない行為」という状況が前提されているにもかかわらず、被害者側にも非があるとする考え方は、スポーツ環境を越えた日本社会全体に共有される価値観とも関連している可能性があり、見過ごすことはできない。スポーツ環境内のセクハラ防止対策において、「傍観」を生み出すこれらの諸要因を検討し、環境改善のための実効力ある方策に反映させ、周知する必要があるだろう。

ジェンダー平等観と同性愛親和度については、男性が女性よりも伝統的ジェンダー観や同性愛嫌悪の傾向が強いことが示され、ともに鈴木(1994)、藤山ら(2014)の先行研究を裏付ける結果となった。対象グループ比較では、指導

者のジェンダー平等志向が最も高い傾向がみられたが、一つの解釈として、近年の社会的なハラスメント認識の高まりのもと、指導者研修などでジェンダー平等を学ぶ機会が以前よりも増えたことが背景にあるのかもしれない。しかしながら、指導者の同性愛に対する親和度は競技者よりも低く、性的指向に対する認識についてはまだ十分に共有されていない可能性がある。

自尊感情について、競技者は指導者よりも、そして女性は男性よりも低かった。Rosenberg (1965) による自尊感情とは、個人が自分は「とてもよい (very good)」と感じる側面ではなく、自分は「これでよい (good enough)」と感じる側面の評価であるとされ、「自分を他者と比べて自信を感じるとか、優越感をもつといったものではなく、自分自身に対して尊敬でき、価値ある人間ととらえることができる程度である」(内田と上埜, 2010, p.257) とされる。競技者や女性がスポーツ環境における構造的弱者であることを考えると、この二者の自尊感情がより低いという傾向は懸念される場所である。

自身のスポーツ観にいちばん影響を与えたと思われる時期のスポーツ環境については、指導者、および男性が最も非民主的なものだったと回答しており(ただし、その環境に対する“評価”についてはたずねていない)、また男性は、より強い権威主義的伝統主義傾向をもつこともわかった。

以上、セクハラに関連しうる諸要因について、個別に対象グループや性自認との関連から整理したが、セクハラ認識とこれら諸要因との関連や、諸要因相互の関連、因果関係等については、それ以外の所属性(年齢、競技種目、競技年数、競技/指導レベル等)を含めて、より詳細な分析をする必要がある。それらについては今後の検討課題としたい。

最後に、特に競技者については、調査時期がコロナ感染拡大の初期自粛期間と重なったため、そうした社会的状況が、調査対象者の心理に少なからず影響を及ぼしている可能性もある点、および、競技者調査が特定の種目(特にチーム競技をする競技者)に偏った点については、本調査における一定の制約として追記しておかねばならない。

<付記>

※本研究は、平成29年度(2017年度)～平成31年度(2019年度)学術研究助成基金助成金(基金)基盤研究C、課題番号17K01729『スポーツ環境における

セクシュアル・ハラスメント：認識にかかわる要因の検討』(直接経費360万円)の助成を受けた研究である。また、スポーツ指導者調査については、最終的な調査項目の調整を公益財団法人日本スポーツ協会スポーツ医・科学委員会研究プロジェクト「スポーツ指導に必要なLGBTの人々への配慮に関する調査研究」と協同で行い、Web調査と実施費用については当該団体に全面的にご協力いただいた。また、競技者調査においては、コロナ感染拡大、非常事態宣言下での協力依頼となった。予測のつかない事態にもかかわらず、本調査にご協力いただいたことに対し、ここに厚く御礼申し上げたい。

<参考文献>

- Brackenridge, Celia (1997) He Owned Me Basically...: Women's Experience of Sexual Abuse in Sport. *International Review for the Sociology of Sport* 32(2): 115-130.
- Fasting, Kari; Brackenridge, Celia; and Sundgot-Borgen, Jorunn (2003) Experiences of Sexual Harassment and Abuse Among Norwegian Elite Female Athletes and Non Athletes, *Research Quarterly for Exercise and Sport* 74(1): 84-97.
- 藤原翔、伊藤理史、谷岡謙 (2012) 潜在クラス分析を用いた計量社会的アプローチ：地位の非一貫性、格差意識、権威主義的伝統主義を例に、年報人間科学 33: 43-68.
- 藤山新、飯田貴子、風間孝、藤原直子、吉川康夫、來田享子 (2014) 体育・スポーツ関連学部の大学生を対象としたスポーツと性的マイノリティに関する調査結果、スポーツとジェンダー研究 12: 68-79.
- Hudson, W.W.; Ricketts, W.A. (1980) A Strategy for the Measurement of Homophobia. *Journal of Homosexuality* 5: 357-372.
- IOC online: Harassment and Abuse in Sport. URL:<https://www.olympic.org/sha> (2021年1月6日)
- 熊安貴美江、飯田貴子、太田あや子、高峰修、吉川康夫 (2011) スポーツ環境における指導者と選手の適切な行為——セクシュアル・ハラスメントに関する男性指導者と女性選手の認識と経験——、スポーツとジェンダー研究 9: 19-32.
- Mimura, C.; Griffiths; P. (2007) A Japanese Version of the Rosenberg Self-Esteem Scale: Translation and Equivalence Assessment. *Journal of Psychosomatic Research* 62: 589-594.
- Mountjoy, Margo; Brackenridge, Celia; Arrington, Malia; Blauwet, Cheri; Carska-Sheppard, Andrea; Fasting, Kari; Kirby, Sandra; Leahy, Trisha; Marks, Saul; Martin, Kathy; Starr, Katherine; Tiivas, Anne; and Budgett, Richard (2016) The International Olympic Committee Consensus Statement: Harassment and Abuse (Non-Accidental Violence) in Sport. *British Journal of Sports Medicine* 50(17): 1019-1029.

- Rosenberg, Morris (1965) *Society and the Adolescent Self-Image*, Princeton University Press.
- 鈴木淳子 (1994) 平等主義的性役割態度スケール短縮版 (SESRA-S) の作成, *The Japanese Journal of Psychology* 65(1): 34-41.
- 高峰修、飯田貴子、井谷恵子、太田あや子、熊安貴美江、吉川康夫 (2009) 女子大学生がスポーツ環境において経験するセクシュアル・ハラスメントの特徴と構造——体育会とスポーツ系サークルの比較——、*スポーツとジェンダー研究* 7: 16-28.
- 高峰修、飯田貴子、井谷恵子、太田あや子、熊安貴美江、吉川康夫 (2011) 日本のスポーツ環境における大学生のセクシュアル・ハラスメント認識に及ぼす要因の影響——性別に着目して——、*スポーツとジェンダー研究* 9: 33-41.
- 高峰修 (2013) 「ハラスメントの受容 なぜスポーツの場でハラスメントが起こるのか？」『現代思想』41(15)、青土社: 157-165.
- 内田知宏、上埜高志 (2010) Rosenberg自尊感情尺度の信頼性および妥当性の検討: Mimura & Griffiths 訳の日本語版を用いて、*東北大学大学院教育学研究科研究年報* 58(2): 257-266.
- Volkwein, K.; Schnell, F.; Sherwood, D. and Livezey, A. (1997) Sexual Harassment in Sport: Perceptions and Experiences of American Female Student-Athletes. *International Review for the Sociology of Sport* 32(3): 283-295.